

学び合いの中で、思考力・判断力・表現力を育てる外国語活動・英語学習
—学んだことを自らいかす子どもの姿を求めて—

1 英語科で願う豊かな学びの姿

[小6] ○今日は英語で買い物をしました。買い物をしながら考えた事は2つあります。1つはジェスチャーが多いこと。指で指したり、手を横に振ったり（違うのサイン）。意外と多かったです。2つ目は、単語で会話が成り立っていることです。「サンキュー」や「グッド！」など、単語で話していることが多くて、これはおどろきでした！（児童A）

[小6] ○今日は、グループでお店をやりました。となりの人と相談して、よりうまくできるようになりました。1回目は日本語が多くなってしまったけど、2回目は習った単語などを使えたのでよかったです。何よりいろんな言葉が使えるようになったのがよかったです。（児童B）

これは小学6年生の外国語活動のふりかえりである。児童Aは、日本語と比較して英語でのやりとりにはジェスチャーが多く使われることや単語で会話が成立することに気づきを得て、驚きを感じている。また、児童Bのふりかえりからは友達との学び合いの中で、より達成感を味わうことができ、言葉で自分の言いたいことを表現できた喜びも感じていることが伺える。このような言葉や文化に対する気づき、他者とのコミュニケーションを通して英語に触れることが楽しいと感じる気持ちは外国語活動の大切な要素であり、言葉に対する思考力を高め、その後の中学校での効果的な文法知識の習得にもつながると考える。

中学校では、外国語活動でのこのような体験を大切にして、学びを中学校へとつなげ、外国語活動において音声で理解できていたことを文字として分析的に理解させる。そして言語的なルールに則って思考・判断したことを表現するような言語活動を取り入れて授業展開を行っている。その際、本部会では「豊かな学びの姿」をただ単に基礎的・基本的な知識や技能が定着している状態を指すのではなく、他者とのかかわり合いを通して、それらを高め合い、探求心を持ってさらなる自己の伸長を図る姿ととらえ、以下のように定義し、実践を行っている。

- 友だちとのかかわり合いを大切にし、互いの考えや気持ちを伝え、それを尊重しあう姿
- 知的好奇心や課題意識をもって学び、自己の伸長を図る姿

次に紹介するのは学び合いを通して思考力・判断力・表現力の育成を目指す中学校の授業実践のふりかえりからである。

[中3] ○なかなか英語だと言いたいことが言えなくて大変でしたが、途切れ途切れでも相手がきちんと理解してくれてとてもうれしかった。（生徒A）

[中3] ○会話の時にはより相手に伝わりやすい表現を使うと楽しくなると思いました。（生徒B）

[中3] ○場面に応じてとなると、普段の筆記ではスラスラ書けるのに、今日は少しとまどいました。頭の中で文章を組み立てるのに若干時間がかかるので、その部分を今後克服したいと思います。（生徒C）

相手に伝わりやすい表現を用いようとしたり、相手の言っていることを理解しようとしたりと相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとしているのが分かる。その中で自分は何をどのように伝えたらよいのだろう、相手の言っていることに対してどのように反応したらよいのだろうという思考力・判断力・表現力の根底となる視点も芽生え始めている。また、課題意識をもって、自分の苦手な部分を克服しようとする姿も見られ、英語科が願う姿に一步步近づいていることもよくわかる。

2 昨年度までの研究の経緯

(1) 外国語活動・英語科における思考力・判断力・表現力

外国語活動・英語科では思考力・判断力・表現力をそれぞれ以下のように定義している。

思考力：場面や状況を多面的な視点で捉え、伝えようとする事柄を言語的なルールに則って考えることができること。

判断力：場面や状況に応じて、言語材料や伝え方を選択し、使い分けることができること。

表現力：思考・判断を通して、場面や状況に応じた最適な方法で相手に伝えることができること。

思考力・判断力・表現力はそれぞれが別々に身に付くものではなく、一連の流れの中で育成され、豊かなコミュニケーション能力の育成につながるものと考え。よって、小学校の外国語活動では自然な場面設定でその言葉のもつ働きや機能を実感的に理解できるような言語活動を設定し、中学校では基礎的・基本的な知識・技能を活用して思考し、判断したことを表現するような言語活動を設定する必要がある。このような言語活動により知識・技能を運用レベルまで深化させることができると考え、実践に取り組んでいる。

そして思考力・判断力・表現力を11年間のつながりが見えるように以下のように定義した。

初等部前期	遊びや生活の中で体験しながら、自分の願い、思い、考えを確かにもち、それを表す力
初等部後期	相手が伝えようとしていることを、今までに学習した表現や、表情、身振り手振りをもとに考えたり、場面や状況に合わせて、適切な表現を使ったりして相手に伝える力
中 等 部	既習の言語的なルール（または約束事）に則って考え、相手の表情や状況等のさまざまな要因を考慮しながら、最も適切な単語や表現を選択し、書いたり、話したりすることを通して、相手に自分の考えや気持ちを伝える力

本学校園では小学3年生から外国語活動を行っており、初等部前期では外国語活動は行ってはいない。しかし、それぞれの段階での思考力・判断力・表現力のつながりを意識しながら取り組む中で、初等部前期から他とかかわる経験を重ね、初等部後期からはそれに加え言葉の面白さや豊かさに気づき、中等部の英語学習ではそれまで触れてきた言語を分析的に理解し、自分の考えや気持ちを表現することの楽しさを味わうことで本部会が願う学びの姿に近づけるのではないかと見えてきた。

(2) 思考力・判断力・表現力を育てる学び合い

昨年度は思考力・判断力・表現力を育成するために、学び合いのねらいを2つに整理した。1つ目は学習した表現を使って友達とやりとりをして、その表現の定着をねらう学び合いである。このような学び合いでは、子どもが他とのかかわりの中で、基礎的・基本的な知識を活用

することができたという思いを抱くことが大切であり、自分の思いを伝えようとしている姿を認め、自己表現することの楽しさを共有できるようなはたらきかけを行った。

2つ目は自分の考えをもち、人の考えと比べながら、自己の伸長を図る探求的な学び合いである。このような学び合いも個の学びへと還元されて個の基礎・基本の定着へとつながる。そしてそれが学び合いを深めることにもつながった。どちらの学び合いにおいても、適切なタイミングで学びの場を仕組んでいくという教師のはたらきかけは欠かせない。また、教師は学び合いをコーディネートするような存在として関わり、学級全体に学びの深まりを与える発言を引き出すよう心がけた。例えば、小学6年生の外国語活動でのかかわり合いの場では「やってみせて」「どうしてその表現を選んだの」などと問い返し、掘り下げることで子どもたちは、自分の英語表現について立ち止まって考え直したり、もっと工夫して表現しようとしたりする姿が見られるなど学びを深めることができた。このような活動を通して、自分なりに工夫して自分の考えを広げたり深めたりしながら思考力を高め、自分で判断して選んだ表現を使って自分の思いを相手に伝える表現力を高めていく姿が見られた。

(3) 思考力・判断力・表現力の評価

小学校の外国語活動では「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語への慣れ親しみ」、「言語や文化に関する気づき」の評価の観点に即して文章の記述による評価を行った。中学校では学び合いによる思考力・判断力・表現力は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」に相当すると考え、これらの観点で単元の始めと終わりのこどもの変容を見とった。そこから、小学校中学校ともに、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」のコミュニケーションの継続に関する部分は、「外国語への慣れ親しみ」と「外国語表現の能力」が土台となっており、ある程度表現力が定着していないと、それらを用いて相手を意識したコミュニケーションをとることができないことが分かった。伝えたときの相手の反応に喜びや嬉しさを感じながらコミュニケーションをとり、それが相手意識の高まりにつながったとも考えることができる。このことから単元を構想する際に「外国語への慣れ親しみ」と「外国語表現の能力」の定着を図ったうえで、コミュニケーション活動を設定することとした。その中で、自分の言ったことが相手に通じたという喜びを学級全体で共有できるようなはたらきかけを行い、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の向上へとつなげた。

3 本年度の研究

(1) 学んだことをいかしている子どもの姿

今年度は学んだことを自らいかす子どもの姿を求めて研究を進めている。学んだことをいかす子どもの姿を次のように考える。

- 英語をコミュニケーションの手段として、実際に使っている
- 伝えたいことを個々の子ども自らが考え、適切な表現を選択して自発的に発話している

上記の姿を求めて授業を構想する際に大切にしなければならないことは、教師の手のひらの上での、使用する言語形態が限定されているような自由度の低いコミュニケーション活動ではなく、言語を総合的に理解したり、表現したりするような言語の実際の使用につながる言語活動を充実させることであると考え。つまり、子ども自身が「この場面でこんなことを言いたい、そのためにはどんな表現を用いてどのように伝えたらいいのだろう」と考え、実際に使っ

てみる（試行）機会を与えることである。そして友だちとのやりとりの中で、自分が言いたいことを伝えるのにこの表現では伝わらない、もっと適切な表現はないだろうかといった試行を通して、自分のもっている知識・技能を活用し、運用する力を確かなものにできるのである。

(2) 学んだことをいかすための構想

日々の授業で行っているコミュニケーション活動を振り返ってみると、そこで使用される言語はその単元で習う文法項目に限定されており、不自然な場合であっても子どもはその文法項目を使って活動する。また、会話例などにしたがって対話すれば活動に支障をきたさない場合もある。現実には言語を使う場面とのつながりや自分との関わりの意識も低く、学んだことをいかすことはできていない。そこで、自由に自分の思いを伝え合い、相手と会話を進めて課題を解決する活動を充実させ、場面や状況に応じて、自分が相手に伝えたいことを適切にかつ正確に表現するためにはどのような言語形態を用いればよいのかを自分自身で判断して使う場面を構想する。このような活動では、相手の反応を見て受け入れたり、自分の主張を通したりと状況を判断して自分で表現を選択し、使い分けることが大切であり、相手意識が必要不可欠である。自分の思いを独りよがりでは表現するのではなく、相手と自分を意識しながら、思考・判断した上で表現する。そして相手が表現したことについて、さらに思考・判断し、また自分が表現するというスパイラル構造が生まれる。現実には言語を使用する場面に似た、自分が主体となる活動である。そこには自発的な発話が期待される。このような言語活動の充実が、学んだことをいかす子どもの育成につながるのではないかと考えている。

4 成果と課題

(1) 成果について

① 言語活動の充実について

使用場面を意識した、現実に近い自然なアウトプットができるような言語活動を取り入れたことで、伝える内容も身近なものとなり、子どもが自分のこととして表現することができた。それに伴い、子どもの「伝えたい」という意欲も向上し、「こんなことを伝えるにはどのような単語や言語形式を使えばいいのだろう」と辞書を引いて考える姿も見られ、言語意識が高まった。

(2) 課題について

① インプットの工夫について

自然なアウトプットの機会を充実させることで、インプットを与えるときにも使用場面や自分とのつながりを意識できるような与え方が必要であることも見えてきた。今後、インプットからアウトプットまでの自然な学びの流れを作って指導していく必要があると感じている。

② 文法的正しさのフィードバックの工夫について

言語活動において、自分の伝えたいことを伝えただけで終わるのではなく、中学校ではそこに正確さも必要となってくる。教師は子ども自身が自分の間違いに気づいて修正できるようなフィードバックを与える必要がある。より効果的なフィードバックの与え方について研究を深めていくことが今後の課題である。 (文責 高田 純子)

【参考文献】

- ・高島英幸（2000年）『英語のタスク活動と文法指導』大修館書店
- ・村野井仁（2006年）『第二言語習得研究からみた効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- ・和泉伸一（2009年）『フォーカス・オン・フォーム』を取り入れた新しい英語教育』大修館書店